

砂漠の頂きに立つ

河はほとんど終点に近い所まできて、漸く砂丘の中をうねうねと流れるようになる。

そんな砂丘の中で、ある日1頭の馬に跨がって砂丘を上へ上へと登ってみた。自分の意志で馬を自在に操れていたなら、私は恐らくそんなに高い所まで登らずに、早々と仲間のもとへひきあげていたに違いなかった。しかし、私は馬に乗ったのはその時が最初であつたし、馬がひとりあるきはじめてしまっても、それを制することもできなければ、諦めて馬から降りようという気にもなれなかった。馬は、自分に任せておけばきっとすばらしい風景を見せてやると言わんばかりに、ゆっくりと着実に砂丘の頂きをめざす。私は時折試すように馬を反転させてみるのだが、それからまた馬は自分の意志で砂丘の頂きへと、時折思い出したようないなきを寂しく放っては足を運ぶ。眼前にアクリルをこぼしたような青い空が広がっていったとき、既に私と馬との間には無言の契約が交わされていたようだ。

やがてアクリルの薄くなった所に突如として地平線が現れ、ダイナミックな私のバード・アイズには、目のくらむような横の広がりを持った無傷の大地と、巨大な光る大蛇の姿があきらかとなった。

この時確かに、私の体のどこかで、それまでさびついていたのかもしれない堅いスイッチがカチリとなった。

(三浦 智)

陽気な中国人たち

みんなを乗せたジープが大西海子ダムに到着。僕は真っ先にダムの階段をかけ上がった。ダムというよりは大きな水門という感じだ。水は思ったより少なく、湖底は所々で水面から顔をのぞかせていた。湖は、はるか彼方まで広がり水面は日の光を浴びてキラキラと輝いていた。これで合宿が終わったんだという実感がこみ上げてきた。全員でここまで来れて本当によかったと思うと同時に、何となくホッとして、とてもいい気分だった。

遠くの方を見つめていると、航行中の楽しかったことや辛かったことが次々と頭の中に浮かんできた。徐々に溜ってくる疲れでイライラすることもあれば、日本のことを思い出し、早く家に帰りたいと思う時もあった。でもそれ以上にいいことがたくさんあった。中国人はいつも陽気で人を楽しませてくれる。偶然に出会う人たちに話しかけてもほとんど聞きとれないのに、言葉を交わすことが純粹に楽しい。ウイグル人の家に招かれ、夕食を